

2020年5月24日  
復活節第7主日

家庭礼拝のための  
聖書・牧会祈禱・メッセージ



## 【聖書】

ローマの信徒への手紙 14章1節～12節 (新約聖書 293頁)

## 【牧会祈禱】

命の源である神様

私たちは神様に送り出されて、それぞれの場所で、学び、働き、仕えてきました。その日々には、喜びや、感謝がありました。しかし同時に、疲れ、傷つき、不甲斐なさを感じることもありました。神様は私たちを癒やし励ますため、この礼拝を備えてくださっています。どうか、私たちをありのまま受け止めて、癒やしてください。

今、家庭で礼拝を守る友たちを祝福してください。入院先でこの礼拝を覚えてくれている友、普段の生活が送れるようにとりハビリ中の友、この状況で心が弱っている友たちを神様が支えていてください。この国で希望を失っている人がいましたら、どうか礼拝まで導いてください。新型コロナウイルスの治療にあたってくださる人々を励まし、人々の生活のために奔走している人々が言われぬ差別を受けませんように守ってください。

軽井沢幼稚園やあなたの名によって立てられた全ての学校、施設で主イエスに倣った働きができますように。そこで働く人々は先の見えない不安や、感染への警戒の中で今できることを探しています。神様、どうかよい知恵をあたえ、地域でよき証ができるようにしてください。

神様、私たちには気づいていない多くの罪があります。人を裁くことは一番私たちが犯してしまう罪です。気がつき悔い改めたこともあれば、気がついていないこともあります。どうか赦してください。私たちは新しく生きるように、神様から赦され、背中を押されています。これから始まる新しい一週間、愛の人として歩ませてください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前によって御前におささげいたします。アーメン。

## 【メッセージ】

今日の聖書は、人を裁くことがテーマになっています。「信仰の弱い人」という言葉が出てきますが、これは直訳すると「信仰に関連して弱くある人」となり、信仰心の薄い人を指しているわけではありません。信仰のことで、小心で神経質になっている人とした方が分かりやすいかもしれません。それでも弱いという言葉は強い立場の人から発せられたものですので、皮肉な

呼ばれ方だったと思います。

ローマの教会にいた信仰に対して神経質になっている人は、野菜だけを食べて自分の身体を神の宮として整えようとしていました。それに対して、信仰の強い人が批判をしました。この強いというのも、弱い人と同じように信仰が篤いという意味ではありません。信仰のことで大胆、または自信を持っている人というこ

とでしょう。彼らは主イエスによって救われたのに、菜食にして身を清めることに何の意味があるのか、と考へたはずです。パウロは言います。「あなたが今、軽蔑している相手はキリストという主人がもっている、キリストの僕だ。あなたの召使ではない」。信仰の強い人がおかしなところを批判し、直すように強制すれば、弱い人の信仰が強くなり、立派になるでしょうか。そんなことはあり得ません。その人を愛しているのも、生かしているのも、その人の主であるイエス・キリストです。

次に問題にされているのは、ある日を、他の日よりも尊ぶことです。日の話のすぐ後に、食べる食べないということが話題にされていますので、おそらくこれは断食の日の話でしょう。ローマ教会のなかでも数人のユダヤ人キリスト者は断食を守り続けていたようです。パウロはこう言います。「食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない日とも、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです」。

この2つの問題、よく読むと、弱い人と強い人が固定していわけではないと気がつきます。信仰の弱い人と呼ばれているのは、ユダヤ人キリスト者だけではありません。つまり、ある時は信仰の弱い人と呼ばれ、別の時には信仰の強い人として裁きを行う。互いに裁きあっているのです。自分の文化が相手の中になければ不満に思い、自分の大切にしていることが馬鹿にされれば、いっそう相手が憎らしくなる。そんな経験は私たちの中にもあります。

どうして、そうになってしまうのか。それは、私たちの主を忘れていているからです。パウロはイザヤ書を引用して言います。「私は生きている」と。「私の僕たちを、自分のもののよにして裁くな。目の前の人をあなたが

どうにかできるわけではない。生きている私に任せよ」と主がおっしゃっているのです。引用は続きます。「すべてのひざはわたしの前にかがみ、すべての舌が神をほめたたえる」。「素直に、神の前にすすめ。あなたのもつ文化、習慣、わたしのために大事にしてくれたことを携えて。それだけでいい。他の僕への裁きなどいらないのだから」と主は言われます。

この聖書箇所はパウロの力強い言葉が印象的です。「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」。

生きているときはもちろん、死のときすら私たちの主はイエス・キリストです。病気をするとき、死が迫るとき、新しい病が流行するとき、私たちは自分の力がいかに弱いかを知ります。ふんぞり返って、信仰の弱い人を裁いても、それはちっぽけなプライドにしかすぎなかったのです。キリストほど彼らを愛せるでしょうか。キリストほど彼らを離さないでいられるでしょうか。できません。ふさわしくないこの私を、この命を、ご自分のものとしてくださったのは、イエス・キリストお一人なのです。

私たちは生きている間に何かを成し遂げることなどできないかもしれません。これまで成してきた愛の業も数えるほどかもしれません。けれども、わたしの僕としてよくやってくれたと、必ず言うてくださる方がいます。あなたと存在はあなたと、あなたの周りの小さな輪の中だけで生きているわけではありません。主イエスの命として生きているのです。だからこそ、他と比べることなく、誇りをもって生きていきましょう。